

上ノ国町には、現在20の町内会があります。

その地名の一つひとつには様々な由来があり、地域の風景や伝説が元になって、歴史とともに受け継がれてきました。しかし現在、少子高齢化による人口減少が急激に進み、今まで当たり前存在した地域がいずれは消えてしまうかもしれません。

そんな今だからこそ、地域を見つめなおすことで理解を深め、郷土を愛する心を育てることが重要になってきています。

ここでは、知っていそうでなかなか知らない、私たちの地域の由来について取り上げていきます。

大留

江戸時代、上ノ国で林業が盛んな時期に、木材の輸送には川の流れを利用していました。

川から流送されたヒノキアスナロなどの材木留場が現在の大留地区に形成されたことから、大留と名付けられたとされています。

北村

上ノ国の本村から見て、天の川の北側の村という意味で名付けられたとされています。

また、かつてこの地を治めた武将「武田信廣」が、現在の北村地区にあった居城「洲崎館」に住んでいたことから、昔から人の多い地域だったようです。

向浜

上ノ国の本村から見て、天の川の向かい側の浜という意味で名付けられたとされています。

当時は、天の川の流れが蛇行して向浜の近くを流れていたため、大留地区と同様に材木留場として栄えていたようです。

原歌

アイヌ語でパラオタ(平らな浜、広い砂浜)が由来とされて、当て字で原歌になっていったとされています。

漁村として大いに栄えた地域でもあります。

大崎

昔は洲根子という地名で、これはアイヌ語のシリエンコロ(鼻の先のような所または岬)がなまり、シネコとなったようです。

大崎は昭和10年に、字名改正の時、文字通り大きな岬にちなんで大崎になったと考えられています。

木ノ子

木材の産地として有名だった木ノ子地区ですが、木を切った後、切り株から草(きのこ)が生えてきたので木ノ子となったと言われています。

海に面していますが、町内でも早い時期から稲作が行われていた地域でもあります。

扇石

昔、扇のような形をした大きな岩があったことから名付けられました。

この扇石岩は、長年の激しい波と風で形が崩れてきていますが、現在も見ることができます。

汐吹

その昔、波がぶつくと鯨の汐吹きのように汐が飛び散る汐吹岩があり、そこから付けられた名前だそうです。その岩は、汐吹漁港の拡張工事の際に取り除かれ、今ではその岩を模したモニュメントが残っています。

石崎

昔、比石(ひいし)という地名で、アイヌ語のピツウシ(石が多い所)が語源です。比石から石崎になったのは、川尻が石の崎になっていたからという説があり、現在の石が多い石崎川の河原を見るに、当時の情景から名付けられたと考えられています。

小砂子

アイヌ語のチシエムコ(水上の高い岩)から転じて小砂子となった説と、昔この浜に身の丈三尺(90cm)ほどの小人が度々上陸していたという小人伝説にちなんで小砂子と名付けられたなどの説があります。

